

# その他

## 召集兵の一生

山梨県 丸山 朝治

私は大正六（一九一七）年十二月五日、東京都墨田区横川にて父朝治郎の二男として出生、昭和四（一九二九）年三月三十一日、横川尋常高等小学校尋常科を卒業し、同年四月より厩橋二丁目にありました脇島製缶工場に丁稚奉公で八年勤めました。昭和十年三月横網区役所で兵役検査を受け、第二補充兵輜重兵とのことでした。

昭和十二年十二月十二日、東京世田谷区大蔵にある第二陸軍病院衛生兵として召集され、階級は陸軍二等兵、六カ月の教育訓練終了後に第二陸軍

病院の薬室勤務を命ぜられ、一等兵に進級しました。冬の寒い日にも古兵の洗濯物を競って洗濯したり、靴の手入れなどで結構多忙でした。

ある時、軍衣の第五ボタンをなくし、そのまま夜の点呼を受けましたが、上等兵殿に他のボタンを取られ、その上ピンタを五、六発もらったことを今でも覚えています。しかし一般の連隊における兵の訓練に比べると衛生兵の訓練ははるかに楽だと聞かされていきましたので、衛生兵で良かったと思っています。

二年ほどして上等兵となり、調剤の仕事、薬の調剤、包装、記録等の仕事に従事いたしました。

昭和十五年十月、紀元二千六百年を祝し、代々木練兵場において観兵式があり、昭和天皇が白馬に

跨り、私達は「捧げ銃」をして陛下の御顔を近くで拝した光栄は、今でも忘れることは出来ません。

昭和十五年十二月に除隊になり、翌昭和十六年一月に埼玉県秩父郡国神村金崎の姉の家に寄宿しました。姉の家は栗原姓で、栗原瓦工場を営んでおり、私は住み込みで一年ぐらい働きました。

その後、昭和十七年四月、横浜造船所に入社、仕事は俘虜の警備でした。当時、米英の俘虜三十人ほどが横浜造船所で働いていました。俘虜収容所は横浜の磯子にあり、磯子から会社まで徒歩で二十分ぐらいですから、その間の警備で、逃亡に注意するため銃を所持し弾薬を携行しますが、実弾ではなく空砲でした。

米英俘虜の中に三人の将校がおり、造船所で図面を引いていましたから、将校は工員的な仕事をしていた訳ではありません。当時は、俘虜の取り扱いには大変意を注ぎ、殴打は絶対禁止で俘虜も私達を信頼し、良く協力してくれまして警備もすこぶる快調、トラブルの発生も皆無でした。一言

で言うとな楽の一語につきます。

俘虜には米国民より慰問袋が送られてきて、カミソリ、煙草、ガムのほか日用品が多く入っていました。空襲時には俘虜を先に防空壕に避難させて、その後に我ら警備員が入るようにしていました。今考えると俘虜逃亡を考慮して俘虜を先に壕に入れたのかと思いますが、その時はそんなことは考えずにやっていた訳です。

ある時、俘虜が私の袖口を引き、壕に入るようにと言いますので私も壕に入りました。私は日ごろ、警備員として俘虜と接しましたが、俘虜など絶対に殴ることなく言動も穏やかでしたので、空襲時に私を先に壕に入れるという行動を取ったものと思います。人種は異なっても愛情を持って接するならば、相手にその気持ちや情けは通じ合うものと思います。

戦争が激化し、俘虜を安全な場所に移すこととなりました。ある日、十一時ごろぼつぼつ昼飯だと思つた時、突如、艦載機の攻撃を受けました。

造船所は銃撃を受けましたが被害は極めて軽微でした。俘虜は別段動揺することはありませんでした。俘虜達はそのうちに米軍の方が勝つと言うような気持ちでいたような風が感じられて、気分も明るく、日本人が考えるように俘虜は恥ずかしく不名誉なことだと思っていない感じを受けました。

造船所における彼等の作業も真面目に、何の屈託もなく作業に従事し、作業効率もよかったと思います。そんな具合ですから私達警備員とのトラブルもなく警備の仕事も楽でした。

艦載機が造船所を銃撃した日、三菱ゴルフ場でも銃撃したのです。人もたいしていない原や松林を銃撃して何になるのかと、何のための銃撃だったかと今でも思っております。

そうこうしているうちに終戦となり、横浜港に米兵が上陸いたしました。米兵は全部黒人兵で白人はおりませんでした。全く異様な感を受けました。指揮官の中にも白人は見えませんでした。また今で言う迷彩服でしたのも異様、かつ背の高い

のにも驚きました。日本の女性は避難していません。米黒人兵は日本の雛人形に興味があり、また日本の人形を欲しがり、米国の煙草やチョコレートなどと交換し、金で買うことはありませんでした。

昭和二十年十月に三菱造船所をやめて、私は再び埼玉県秩父郡国神村金崎の姉の家に寄宿、瓦工場の住み込み職人となりました。終戦直後の物資の乏しい中でしたが瓦の売れ行きがよく、また物々交換で物に困ることもなく、瓦さえ作れば姉のところも楽にやっていました。瓦を作りさえすれば引つ張りだこでしたから、張り合いのある日々でした。

一年ぐらいして私のところに警察官がきて、旅費が支給され、名は忘れましたが横浜磯子にあった立派な旅館に行きました。磯子には米の戦犯収容所被疑者調査所があり私は被害者となったわけです。

三菱造船所にいた時に、前にお話しした米英俘

虜兵の警備をしていた当時、俘虜の扱いや殴ることをしたか、俘虜にきた慰問品を横取りしたことがあるか、俘虜に不利な行為がなかったか等多くのことを聴かれました。私はそういうことは一切しません、煙草一本もらったこともありません、と答えました。

その調査所には何人かの訊問官がいましたが、各人個室で、訊問官白人一人に日本人二世と思える日本人通訳一人で尋ねるのです。時間ばかり掛かり訊問は余り進みませんでした。私は先に述べたように俘虜に対しては厚意をもって接し、磯子当時、俘虜が私をかばうて空襲時には防空壕に私を先に避難させてくれたことを述べました。

そのためか私の被疑事実はなく、相済みとなりました。しかし、その調書の作成に手間取り、休みの日もありましたが一週間ほどかかりようやく用済みとなりました。旅館の費用は先方持ち、日当は二百円と破格の金でした。当時の二百円は一家の一カ月の生活費ぐらいいかと思えます。それに

一週間は煙草もコーヒーも出ましたから別天地の感じがいたしました。

今にして思いますが、私は徴兵検査で第二補充兵、召集兵で衛生兵とて陸軍病院勤務の薬剤調査などでビンタなど余りくわず、俘虜の警備なども厳しくなく接することが出来たのではないかと思います、何が益するやうなためになるのかを思うと、分からないが運と言う外はないと思います。

私の知っている戦犯裁判で刑を受けた人が二人おります。名前は申し上げられませんが一人は米軍俘虜にきました慰問袋から煙草外三品ほどを取り上げ、それで取り調べを受け、刑期三年とか。

また俘虜を殴ったと言うことで刑期十年、某少尉は自分は何もしていないが部下の責任を負わされて処刑されました。年は二十三歳とか、俘虜収容所の所長でした。性格の良さそうな人で学徒兵だったかもしれません。戦争犯罪の調査もいいかげんで出鱈目な面もあったと思っています。

私は昭和二十三年に結婚、式は秩父の旅館で行

いました。そして、それを機に埼玉県秩父市下影森のキャノン電子本社に就職致しました。カメラ部品の製造に工員として、五十五歳の停年まで働き、製造部主任が最後の職責でした。

私は学歴がないのですが、学校出の方は二、三年で主任となります。私の息子は早くから甲府の水晶店に勤め、今東京銀座の松屋百貨店の貴金属店の責任者として働いております。

昭和五十年九月十五日に甲府の息子の家に移り住み現在に至っております。

## 内地勤務の教育係として

福岡県 森 泉

(旧姓 木下)

私は大正十一（一九二二）年九月二十五日、福岡県山門郡山川村にて父木下仁三郎、母ハツの三男坊として蜜柑農家に生れました。

この地は天地澄明、寒村ながら気候、風土、絶佳の中で、男三人、女三人の六人兄弟で、皆健康に育ち、両親の傍らで家事を手伝いをしつつ成長しました。母校、山川南部尋常高等小学校高等科を卒業、続いて青年学校へ進み、心身の鍛練と研学修業に励みました。

そのころのラジオニュースや新聞の報道には、若者の血を沸かせるような出来事が次々に発生する時代であったと思います。中国では蔣政権に対し、王兆銘、周仏海、王克敏の政府の事や、ドイツからはヒットラー・ユーゲントの日本訪問があ